

Igroup

communication

Special 10
2024年1月31日発行

一人ひとりの一隅を
照らし続ける。



【特集】

2024年 経営指針書

大切な職員の引退を迎えて

新卒入社スタッフのインタビュー

BOOK CAFE PERCH

トークイベント
クリスマスイベント

2024年 経営指針書

今年のテーマは、“一蓮托生”。 当法人の企業理念を再構築する視点として重要と考え 職員に周知しました。

今年のテーマは、“一蓮托生”。
当法人の企業理念を再構築する視点として重要と考え職員に周知しました。

当法人内には、たいせつにしているいくつかの言葉があります。

- ①一隅を照らし続ける
- ②ここがあるから私になれる

①一隅を照らし続ける は、天台宗の開祖 最澄の言葉を元に考えました。

天照大神も関連することから当時女子ホームのみで女性の支援をイメージして選びました。

「一隅を照らす」を「照らし続ける」にした理由は、一時を照らすのではなく、照らし続ける、関わる子へ長く関わりを持つ思いを込めています。

この視点は開設間もない頃に受け入れたご家族から言われた言葉がきっかけになりました。

『あなた達はただか5年しか関わらないのに偉そうなことを言うな。私はこの子を17年育ててきた。どうせ20歳までしか面倒みないのだから。一生涯世話をする一筆書け。』と言われたことがありました。

この言葉を聞いてハッとしましたし、中途半端な気持ちではなかったものご家族の気持ちも、ごもっともだと感慨深い経験をさせていただきました。

この子も退去して数年たち今年アラサーといわれる年齢になりますが、現在も当法人のステップハウスで生活支援を続けています。

この子はホームに在籍中も他の利用者の見本となるような子で、就労継続を頑張って1時間以上かけて徒歩で通い、介護の資格取得もして、出産も経験し、今年も自動車免許を取得する為に毎日深夜3時まで働いて貯金して生活を頑張っています。

当法人の支援期間29歳までは見守っていきたくと考えています。

②ここがあるから私になれる は、身近な大人から裏切られて人間不信になっている子と関わる中で、自己肯定感を育むことが重要であると実感し選んだ言葉です。

本当の自分が分からない子、意識の中で分裂した視点を持つ子や裏切られるくらいなら自ら関係を断つ子等、さまざまな想いと向き合う中で、その子の本意を引き出すことは難しく力不足を感じていました。

殻をとっばらって、猫かぶっていないで、『私』になっても安全だよ。

『ここがあるから』安心してね。

私たちはどんなあなたでも受け入れるよ。という温かな想いを言葉にしました。

個性は可能性と意識して支援する取り組みをしています。これまで出会った大人とは違うことを言うかもしれないけど、安心安全を与えたい。

願いは、生きていてくれること。できない自分も認めてあげてね。

大切な職員の引退を迎えて

長年勤めあげていただいた職員の引退を迎えて 寂しい想いを巡らせています。

当法人の第1号のホームを開設して6年経過して、それぞれ各地のホームでも目まぐるしく職員も入れ替わり、長年勤めあげて定年後再雇用を繰り返し70歳まで勤務していただいた職員の引退を迎えて寂しい想いを巡らせています。このホーム開設前に同じ場所で他法人の方がデイサービスを運営していました。

その法人の社長も私の前職からのお付き合いがある方で、デイサービスを閉鎖する際にデイサービスの職員をご紹介いただいた経緯で出会いました。

面接もゆめタウンの喫茶店で行い、世間話をしながら養育論を語り合い、人として魅力がある人財と判断して勤務していただくことをお願いしました。

『私は料理や掃除しかできないそれでもいいんやろうか』と言われたことは印象的でした。

その後、2018年2月開設時に予定どおりに開業することができなくなり、入居予定者や職員も数名採用していたのですがほとんど全員離れていき、開設前からつまづいていたのを懐かしく思います。

その中で唯一開設まで待っていただいた職員さんでしたし、短時間の労働時間中に掃除・調理・後片付けと完璧にこなされていて、とても頼りになる存在でした。

3月28日の開設後に1人目の利用者と職員・職員の家族を連れて、近くの公園へ行き花見をしたのですが、その時のお弁当もこの職員さんが手際よく作ってくれて良い思い出です。

その後も道しるべのように先導して助言していただき、時には激励や説教をしてくれるなくてはならない存在になってきました。

開設して3年間は就労メインの自立援助ホームでやりがいを感じながら取り組んでいました。

その後は利用者の層が変化して、就労がむずかしい子や精神疾患を患っている子、高校生等の就労ができない子が増えていくにつれて自立支援に課題を感じて日々葛藤していました。

その頃か何度か『自信がない。これでいいのだろうか。なんか違うような気がする。』と迷う相談も増えましたし、離職を考えている相談も受ける機会が増えました。

それでも支え合い就労に結びつけ、就労が続いていることを利用者と共に喜ぶ時もありましたが、ある日突然その子も家出をして帰ってこないことや新しい仕事へ行く子を送り出すとその子が職場で性被害にあってしまったり、子どもたちの命にかかわるような大変な出来事があったり、良いことばかりではない経験を共に乗り越えてきました。

個人的にはいくつになっても、どのような形であっても関わり続けていただきたかったし、私にとって支えであった職員のひとりです。

引き留めたい気持ちはあったものの、引退の言葉を聞いて受け入れました。

その後は私もプレイングマネージャーから引退することを決めて現在法人内でのスーパーバイズの役割を務めています。

開設から引退まで『感謝』を学ばせていただいた職員でした。ありがとうございました。

■ 新卒入社スタッフのインタビュー

伊藤 茉柚 (26)

テンポラリー勤務。入社1年目。麺類と甘いものが好き。図書館や美術館がお気に入りの場所。休日には本を読んだり映画を観たりして過ごす。

私は令和5年3月に入社し、それまでは大学院で教育学を学んでいました。学生時代に学んだことを子どものために活かしていきたい、との想いを胸に現在も支援に携わっています。

支援を行うなかで痛いほど感じることは、「普通」ということの難しさです。学校に行くこと、働くこと、ひいては日常生活を送ることも、それが当たり前で普通とされています。しかし、その普通、社会から求められる普通ができない子どもが多くいることや、それ以上のことを強いられていたために反動でできなくなった子どもが目の前にいます。入社当時は自立＝普通のことができること、だと私は漠然と思っていました。何とかして学校に行かせる、働かせる、「何とかしなくては」と支援に当たっていました。そんな支援方針ではうまくいかず、子どもとぶつかりながら仕事をしていました。

そんな中、理事長や職場の先輩方に相談に乗っていただく機会があり自身の指導観や子どもの状況を話したところ沢山のアドバイスを頂きました。大人の常識を押し付けるのではなく、子ども自身の価値観を受け入れること、支援者は子どもの味方になり、ブレないこと等と自分にはなかった視点を沢山いただきました。そこから、視点を変えながら支援

を行っていくと、子どもから歩み寄ってきてくれることが多くなりました。子どもが抱えていることや、将来のことなど話してくれるようになり「自分はどうしたいか」という抑圧されてきた思いを吐露してくれることもありました。選択肢の多さに不安を感じている子どもも多い中で、言葉や態度で「応援している」「サポートする」と伝えることの大事さを学びました。

また、待つことの大事さも学ばせていただきました。子どもからの相談に、「こうしたらいいのに」「こうすべき」と考えが浮かび、どこか無意識に大人の考えるルールに乗せようとしていました。しかし、答えや結果を急ぐほど子どもを急かして、本当にやりたいことをやらせていないことに気づきました。支援者の役目は子どもを追い立てるのではなく、どんなに時間がかかってもやりたいことや好きなことを見つけ、社会に送り出すことだと改めて気づくことができました。

現在も子どもと向き合うなかで、社会の厳しさを感じることや学ぶことが多くあります。支援者として、大人としてできることがあるだろうか考える毎日です。「目の前にいる子どもたちがありのままにいられるような、支援をしたい」とそんな思いをもって今後も支援を行っていきたいと思っています。

■ 新卒入社スタッフのインタビュー

平山 暁心 (22)

テンポラリー勤務。入社1年目。寿司が好き。運動が得意、勉強は苦手。休日はゲームを楽しむ。

私は学生の頃から「18歳以上の保護されない子どもたちはどうやって生きていけばいいのだろう」という疑問を持っていました。そんな疑問を持ちながら、福祉系の専門学校へ入学し、そこで18歳以上でも居場所となる自立援助ホームの存在を知ったことがきっかけでNPO法人アイグループに入社しました。

入社するまでは自立援助ホームについて理解が乏しく、居場所としての役割というイメージが強く児童養護施設の延長線上にあるような認識でしたが、入社後は居場所であると同時に自立へつなげる場所であることを理解する事が出来ました。そのため入社当初は、手助けできるものは手助けするという考えでしたが、現場で働く先輩方の関わり方を学び、子どもたちの自立を考え職員が関与しないことの必要性やつまづいてもまた挑戦できるようなサポートが大切だと感じました。

また、入社してから一番気を付けている事は、同じホームで働く職員の皆様と足並みをそろえて動く事です。きっかけは各職員によって児童との関わりに大幅な違いがあることで支援が難しくなってしまうケースを経験したからです。送迎ひとつにしてもその子にとって送迎サポートが必要であるか

どうかを各職員が個人で判断してしまうと、職員によって対応に違いが出てしまい子どもたちの不満につながります。統一されていないサポートでは、その不満への対応や後々の児童との関係性に難しさを感じることもあることを学びました。こういった影響で自立や進学に向けた支援が職員全員で行う事が出来ず、結果的に子どもたちにとって不利益となってしまうことがあると感じたため、個人の考えで動くのではなく、チームとして動くことを心がけています。

私は現在女子ホームの職員として在籍していますが、このような環境で男性職員として働く事は想像以上に難しく、子どもたちと関係性を築くのに女性職員よりも多くの時間を必要としました。しかし、その反面時間をかけて関係性を築いた際に、子どもたちからの相談を受け、支援に携わった時にやりがいや楽しさを感じています。現在はある程度関係性を築く事ができ、年齢が近く男性職員だからこそできる相談や、私自身の人柄を見て相談してくれる子がいるため自信をもって子どもたちと関わることが出来ています。職員としての業務は直接的な支援だけではなく、自立に繋げるために制度の利用といった事務的な業務もある為、正しい知識を学び子どもたちと関わっていきたいです。



■ イベントスペースとしてのPERCH

BOOK CAFE PERCHでは、いろいろな形でこのスペースを有効に使って、ここに関わる子どもたちにとってもよい経験になればいいなと思っています。

BOOK CAFE PERCHでは、若年者支援活動としてのカフェ運営と合わせて、この場所を活かして子どもたちに良い刺激となるような催しを企画していこうと試みています。その取り組みのスタートに、今回、福岡県大野城市出身の登山家渡邊直子さんのトークイベントの会場として、PERCHを使っていたことになりました。渡邊さんは、子どものころから様々な旅をしてこられました。中国の無人島やモンゴルの草原で冒険をしたり、パキスタンの山でトレッキングしたり。そういう冒険をさせてくれる団体が当時の福岡県にあり、彼女はそこの企画に参加していました。

学校生活では、いじめの被害にあうなどつらい体験もされたそうですが、渡邊さんには、自分らしくいられる山での経験、冒険をともにする仲間たち、家族や学校以外にも見守ってくれる大人たちの存在がありました。学校以外に、自分が自分でいられる居場所、誇れるものがあつたのです。社会に出てからは、看護師として働きはじめます。彼女がいま挑戦している山々は、世界の屋根といわれる「ヒマラヤ」です。世界には8000mを超える山が14座あり、それらはすべてヒマラヤに位置しています。渡邊さんはその14座すべてに登ることを目標にされています(参考:エベレスト標高 8848m・富士山標高 3776m)。看護師として働いた給与をコツコツと貯め、住居も引き払いカプセルホテルで生活しています。その自己資金で1座、また1座とヒマラヤの 8000m峰に挑戦してきたのです。現在では、渡邊さんの挑戦を見守る支援者の方や、スポンサー企業にも応援してもらい、すでに13座の登頂に成功しています。そして残る1座である「シジャパンマ」という山に昨年秋、挑戦していました。そのシジャパンマ遠征の報告会が、去る12月16日に行われたのです。

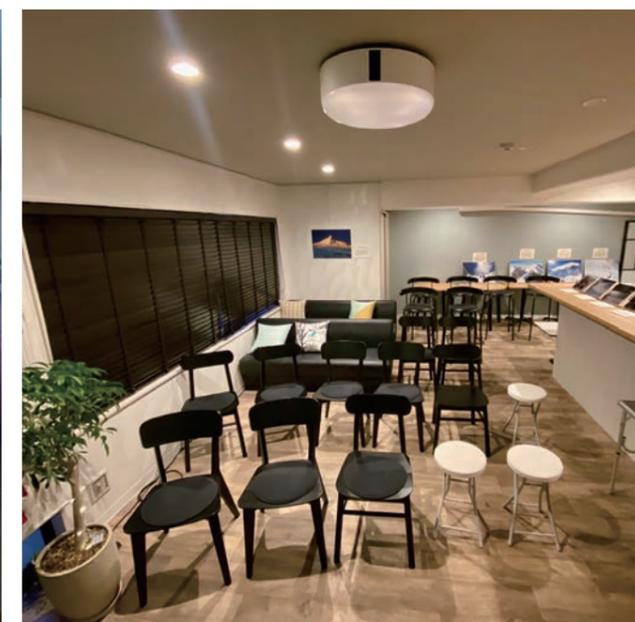
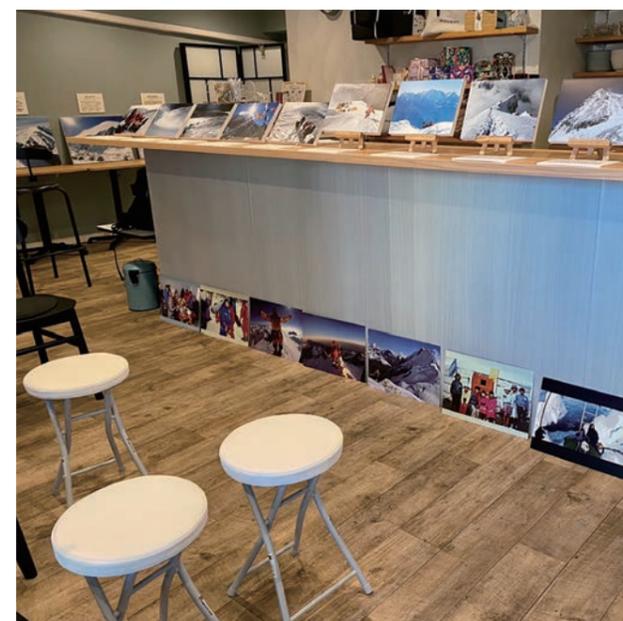
約2週間前から告知が始まりましたが、渡邊さんのSNS等での呼びかけにあつという間に約30名の方が集まりました。イベント当日は、土曜のとても冷える夜でしたが、会場はみなさんの熱気で温まっていました。渡邊さんが語るシジャパンマ遠征。彼女が見てきたもの、体験したこと、感じたこと。臨場感あふれるエピソードが続きます。スクリーンに映し出されるチベットの風景や、美しい山々、そして高所登山の様子に息を飲み、みな引き込まれていきます。時折笑

い声も聞かれるような和やかな雰囲気でしたが、壮絶な山での体験談に、トーク終了後も質問が途切れません。

そんな渡邊さんの夢は、14座登頂だけではありません。あくまでも14座は通過点だと話します。ご自身が子どものころに参加していた団体のように子どもに冒険をさせられるような団体をヒマラヤで作ること、それが彼女の夢です。14座に登頂することで、安心して子どもを預けてもいいと思ってもらいたい、そのための14座登頂なのだそうです。また現代社会でストレスを抱える大人たちにも、ヒマラヤに来て、山を眺めて元気になってもらいたいそうです。報告会の会場でも「自分の子にもそんな体験をさせたい」「今度、渡邊さんとヒマラヤトレッキングツアーに参加する」という声が聞かれました。

自分が好きなことをする、好きなことをするためには苦手なことも頑張る、そんな姿勢を彼女から感じます。考え方がとてもシンプルです。好きだから、する。やりたいから、頑張る。夢中になれることが見つかるのは幸せなことだけれど、もしも好きなことが見つからなくても焦らなくて良いのではないかと思います。誰かにどう思われるかとかではなく、自分の気持ちに素直に向き合っていくことで、いつか、自分にとってのたいせつな「好き」なものが見つかるかもしれません。彼女を見ていて、そんなことを思いました。

会場に飾られた、彼女が撮影したヒマラヤの神々しい山々の写真。イベントの数日前に飾りましたが、PERCHを訪れた方たちもその景色にみなさん見入っておられました。これからもBOOK CAFE PERCHでは、いろいろな形でこのスペースを有効に使っていかれたらと考えています。その中での出会いが、ここに関わる子どもたちにとってもよい経験になればいいなと思っています。



■ PERCH 2度目のイベントは Xmas party!

雪降る日の Xmas party, 大いに盛り上がりました。

イベント10日前、1週間前、5日前、それから毎日のように天気予報サイトを何度も何度も確認しました。…が、予報は変わらず。イベント開催予定の12月21日の天気予報には、「今季最強寒波」「大雪の恐れ」などの文字が並びます。参加予定者は、近隣の春日市をはじめ、北九州市、中間市、それから熊本県、長崎県の各ホームから交通機関や車で来てくれることになっています。無事に開催できるのか、そもそもスタッフは出勤できるのか。不安が募りましたが、開催できることを信じて準備を進めました。

イベント当日の朝、なんとか開催できそうだという判断をし、緊張しながらみなさんを待ちました。PERCHの窓の外はしんと雪が降り続けます。目の前のクローバープラザの植栽が緑色から白銀にすっかり変わったころ、扉が開き、ひゅうっと吹く冷たい風と一緒に最初の参加者がやってきました。みんな笑顔です。「寒い中ありがとう!」「大変だったよね、来てくれてありがとう!」スタッフ一同一気に気持ちが温まり、イベントスタートです。

今回企画したのは、手作りクラッチカードでのくじ引き、トナカイわなげ、ホワイトチョコレートファウンテン。そして、軽食とデザートを提供にも挑戦し、ドリアにピザトースト、レアチーズサンデーや抹茶サンデーなどをメニューに加えました。会場は終始にぎやかで、笑い声やはずんだ会話が聞こえてきます。子どもたちの楽しそうな様子、スタッフとのわきあいあいとした雰囲気を感ずることができました。



イベントに際し、近隣のホームは応援スタッフを派遣して協力してくれました。遠方から参加のスタッフは、帰路の天候や交通状況も気にしながら大変だったと思います。滞在時間より移動時間のほうが長いホームもありました。法人スタッフ全体がイベントに前向きに参加してくれる様子に、感謝の気持ちでいっぱいでした。そして何より、子どもたちが楽しそうに笑う様子やイベントを心待ちにされていた様子を肌で感じる事ができて、ご褒美をもらったような気持ちになりました。

普段ステップハウスで暮らしている子も来てくれたり、退去した子が赤ちゃんを抱きながら参加してくれたりもしました。こうしてホームから巣立った子どもたちとのつながりを持ち続けることも、PERCHのたいせつな役割であることを再認識しました。

「次はいつやる?」と子どもたちからの声。心温まる感想もたくさんいただきました。スタッフ一同、また腕まくりをして、次のイベントを企画しますね!



誕生日企画、始めます。

当法人は、子どもたちの誕生日をたいせつにしています。PERCHでも、誕生日に子どもたちのために何かできないかと考えました。そして今年の1月からの新しい取組みとして、ホームに入居する子どもたち、また住所がわかればホームを巣立った子供たちへ、誕生日に合わせてPERCH特製の焼き菓子プレゼントすることにしました。

人生の中でホームにいるのはほんのわずかな間ですが、ホームを巣立った後にも、誕生日にこんなこともあったな、PERCHという場所もあったな、とふと思い出してもらえたら、誰かに会いたくなったり話をしたくなったりした時にはふりと立ち寄ってもらえたらな、と思います。心を込めて、贈ります。楽しみにしてくれたらうれしいです。

子どもたちの自立を
家族のように支援する、
プロフェッショナルたち。



えん

自立援助ホームえん

イベントに伴う外出は、ホームでは見ることができない
子どもたちの顔を見ることが出来る良い機会になりました。

2023年の年末はいつになく暖かく穏やかな日が多かったように感じます。恒例のクリスマス会では、子どもたちのリクエストに応えた料理やケーキがテーブルを飾りました。サンタクロースからのお届け物を待つ年齢ではありませんが、どの子もプレゼントは何にしようかなと会話が弾んでいました。法人からのクリスマスプレゼントの取り組みは毎年続いています。今年のプレゼント購入は職員が子どもたち全員を連れてショッピングモールへ出かけました。それぞれが考えた欲しいものを購入することができました。購入後はフードコートで昼食を皆で済ませ楽しい一日を過ごすことができました。このようなイベントに伴う外出は、ホームでは見ることができない子どもたちの顔を見ることが出来る良い機会になりました。年末にはおせち料理の準備をおこない無事に新年を迎えることができました。元日には近くの神社へ初詣にでかけました。今年1年の願いを込めて



それぞれが手を合わせている姿がありました。みんなどんな事を思いどんな事を願ったのでしょうか。どの子にとっても2024年が素晴らしい1年でありますように職員も手を合わせてお願いをしました。去年よりも今年、昨日よりも今日と、生きることへの喜びや希望を積み重ねていけるよう行事などの経験、関わりの中で少しでも多く感じてもらえるような支援をしていきたい。手を合わせる子どもたちの姿をみてあらためてそう決意をしたところです。

テンポラリー

テンポラリー

2023年の締めくくりはホームへの日頃の
感謝を込めて大掃除をおこないました。

テンポラリー2023年の締めくくりは大掃除でした。職員が掃除を始めると一人の子が率先してお手伝いしてくれました。窓を拭いたり庭の片づけをしたり、ホームへの日頃の感謝を込めて大掃除をおこないました。年末には毎年恒例になっている黒瀬ぶりが届きます。ホーム長から子どもたちへの贈り物です。日頃、食卓にお刺身が上がるのがないためお刺身好きの子どもたちは大喜びです。31日にはお節料理やお雑煮の準備をします。できる限り手作りの物を食べてもらえるように心がけています。今回は栗きんとんや煮豆、紅白なますを手作りました。栗きんとん、かまぼこの飾り切りは児童1人でおこないました。職員と共に台所に立ち料理をする姿は頼もしい限りでした。おせち作りを終えて年越しの夕食にはてんぷら蕎麦を食べ、年が越えたタイミングで近隣の神社に初詣に出発。夜中に外出することは減多にないため職員も子どももワクワクでした。慌ただしい年末ではありましたが2023年を無事に終えることができました。2024年の幕開けです。今年はどうなるのでしょうか。良いことばかりの毎日では無いかもしれませんが。辛いこと悲しいこと苦しいこともあるかと思えます。そんな時にホー



ムのが頭に浮かぶ関係性を築いていけるように日々子どもたちと関わっていきたくです。子どもたちがそれぞれの思いを形にしていけるように職員一同で支えていきます。

LUCK

自立援助ホームLUCK

笑顔多き一年になるように

新年あけましておめでとうございます。

寒さもまだまだ続く中、LUCKでは新しい環境にも慣れ、子どもたちが学校やアルバイトや遊びにと日々活発に動いています。昨年は新しい入居者や職員が増え、それぞれの考えや思いを知り、改めて気づかされる事の多い一年でした。ホームでは自分で出来る事は子どもたちに任せ、自分の意思で行動してもらっていますが、社会に出てそれぞれが困らないよう話し伝える事もあります。その中で子どもたちの成長が見え、自立に向けて着実にステップアップしている姿を見ると密かに喜びを感じます。年明けには各自2024年の抱負を書いてもらいました。実行できるよう少しでもサポートできればと思います。3月には高校を卒業し就職、進学を控えている子たちもあり、今までとは違った環境に戸惑う事もあると思いますが、安心して過ごす居場所を作るよう職員が一丸となって頑張りたいと思います。そして、躓いて立ち止まったとしてもいつでも職員や大人を頼って何でも話ができるような



関係性をさらに深く築いていければと思います。今年も昨年同様、子どもたちに意見を聞きながらホームでの生活以外にも良い思い出作りが出来るよう、さまざまな行事を考えています。子どもたちが少しでも「このホームで過ごせて良かった」と思ってもらえるよう一緒に楽しめたらと思います。子どもたち、職員共々、笑顔多き一年になる様願っています。

テンポラリ小倉北

テンポラリ小倉北

今年も家庭的でアットホームな小倉北でありたいと思っています。

新年明けましておめでとうございます。

年末から新年にかけてクリスマス会とお正月を子どもたちと一緒に過ごす事が出来ました。

クリスマスは各自好きなプレゼントを選び、心から喜んでいました。お料理もみんなが好きなメニューを用意し、たくさん食べていました。6人全員で参加し楽しく過ごせました。

お正月は一緒におせちを作りました。おせちのメニューの意味を一つ一つ説明し、詰める場所も相談しながら一緒に決めました。ほかの子も喜んでくれるようにと心を込めて、初めてのおせち作りを楽しんでいました。また、ぶりのお刺身が好評であっという間に食べ終わり、嬉しそうにしていました。

元旦には近所の神社に初詣にも行き、お参りもしました。おみくじで大吉を引いて喜ぶ子、あまりいい事が書いてなくて「もう1回」という子もいました。まだ新年始まったばかり、これからたくさんのはじめての体験が待っていることでしょう。



2024年の抱負を書きましたが、職員に相談したり悩んだりしながらも自分で決める事が出来ました。健康で楽しい1年になるように見守りたいと思っています。

今年も家庭的でアットホームな小倉北でありたいと思っています。子どもたちと職員一同、共に成長していける1年にしていきます。今年もよろしく願います。

Permit

Permit

こてつ(柴犬)がいてくれることで、Permitで暮らす人たちのコミュニケーションの機会が増えています。

Permitでは12月に入居者が1名増え、入居者5名、犬1匹で生活しています。新しい仲間をお迎えした日がちょうどクリスマス当日だったこともあり、リビングでチキンを食べたり、トランプで遊んだりしながら同じ時間を過ごすことができました。アルバイトや学校等、それぞれの生活がある中で揃って食事をする事や出かけることも少ないので、こうして一緒に過ごす時間がお互いのことを知り、仲を深める貴重な機会になっています。計らずしてちょっとした歓迎会ができたようで、職員としてもありがたい時間でした。

年始は、多賀神社に初詣に出かけることができました。日頃は神社に参拝する機会もなかなかないですが、1年の初めに新年の抱負や願いをもって参拝することができました。

今回は職員の運転する車でお出かけしましたが、道中の車内も貴重な時



間です。日頃、聞けないような話や何気ない会話の中で、お互いに新しい発見があることもあります。何気ない日常生活の中でも、イベントを通したふれあいの中でも、こうしたコミュニケーションを重ねることで少しずつ互いを信頼し、安心できる関係を築けるように意識しています。

また、こてつ(柴犬)がいてくれることで、Permitで暮らす人たちのコミュニケーションの機会が増えています。生き物を飼うことは大変なことではありますが、与えてもらえる物も大きいと実感する日々です。

1日1日を大切に、素敵な1年を創っていきます。

inn

自立援助ホームinn

年末年始はイベントで子どもたちと楽しい思い出を作ることができました。

innでは、3名が新たに入居し、現在6名の児童が生活しています。短期間に3名の新しい仲間が加わり、みんなで食事を共にしながら、笑顔が増え活気のあるホームになりつつあります。生活に慣れてきて、他の子へ不満を口にする事もありますが、職員へ相談し、共に問題解決へ励んでいます。

年末年始はイベントで子どもたちと楽しい思い出を作ることができました。「充実した年末だった」「来年も楽しみ」「ありがとう」などの感謝を伝えられ、職員もよりイベントを楽しんでもらおうと意気込んでいます。12月には、BOOK CAFE PERCHでのクリスマスパーティーに参加し、innホームでもクリスマスパーティーを行いました。BOOK CAFE PERCHでのクリスマスパーティーでは、新しく入居した子2名が参加し福岡までの車中もいろいろな話ができて、コミュニケーションを図るいい機会にもなりました。会場では良い雰囲気の中、美味しい食事やゲームなども楽しんでいました。innでのパーティーでも、ケーキやチキンを食べ、プレゼントによるごち、ロシアルーレットなどのゲームをしました。正月には、おせち料



理を楽しみ、新年の抱負を書きました。

今後のイベントも、子どもたちからの要望を聞き、一緒に考えて計画しており、次のイベントの日はまだか待ち望んでいます。

今年も、子どもたち、職員共に良い一年にします!

ラブ

自立援助ホームラブ

安心出来る居場所となるよう、
あるがままを受け止め、認め、
見守っていただけるホームでありたいと思います。

令和5年もあっという間に過ぎていきました。年末にはステップハウスを体験している子に会いに行くことが出来ました。ホームに居る時よりも表情が一段と明るくなり、1人暮らしの大変さ将来に向けての話などを沢山することが出来ました。クリスマスにはツリーの下にプレゼントを準備し、児童にサンタさん来てよーと声掛けすると部屋から出てきて、プレゼントを見ると大喜びの児童たち。その笑顔に職員までもほっこりする時間を貰いました。みんなの笑顔でこの1年を締めくることが出来ました!!
日々の生活では、つまずき・嫌な事もあるけれど、安心出来る居場所となるよう、あるがままを受け止め、認め、見守っていただけるホームでありたいと思います。その子にとって最善な支援をしていきたいです。



庵

自立援助ホーム庵

庵に帰ればホッとするとおもうような
ホームでありたいと思っています。

2024年あけましておめでとうございます。庵では現在5人で生活しています。
2023年、多くのことを体験させていただきました。夏祭り、ハロウィン、クリスマス会。子どもたちと出掛けいつもと違う会話も増え楽しい時間を過ごすことが出来ました。
2024年も子どもたちに沢山の経験をし、いろんなことにチャレンジしてほしいと思っています。育った環境などそれぞれですが、今まで出来なかった事や経験を積み、学び、退所した後に何か役に立つこととなればと思っています。
2024年庵の児童の抱負はそれぞれです。「自分の意見を言えるようになる」「学校とバイトの両立」「貯金をする」「単車の免許取得」「体力をつける事」。5人がそれぞれ目標を掲げています。その目標に向けて職員も力になれるよう全力で応援します。目標に向けて落ち込むことも多々あると思う難しいこともたくさん出てくると思います。困った時に困ったと言える信頼関係を築いていけるよう私達も努力します。無理せずその子



の考えや思いをしっかり聞き一番いい方向に向かっていけるようサポートできればと思っています。「いってきます」「いってらっしゃい」「ただいま」「おかえり」など自然に声に出し、庵に帰ればホッとするとおもうようなホームでありたいと思っています。1月からは新しく入職した職員もいます。子どもたちと職員とみんなで笑顔あふれるホームを目指していきます。



テンポラリくまもと

テンポラリくまもと

共に暮らす他の子のことを思いやる心も
身につけてきているように感じます。

新年あけましておめでとうございます。
現在、テンポラリくまもとは三名の児童が入所しています。
去年は退所した子が結婚するとの報告を受け、新しい命の誕生を心待ちにしている幸せいっぱいの笑顔を見ることができました。
在籍している子も夢に向かって勉強に励む姿、バイトと学業を両立させ頑張っている姿を見せてくれました。そんな中、職員と話しているうちに悩みや葛藤を打ち明けてくれ、その都度今後の方向性をどのようにしていきたいのか一緒に考え、その子自身の視点を大切に将来に向けての目標を立てることが出来ました。
年末のイベントのクリスマス会ではプレゼントに大喜びしていました。児童と共に楽しい時間を過ごすことができました。また、共に暮らす他の子のことを



思いやる心も身につけてきているように感じます。
2024年、ホームでのイベントを計画しており一緒に楽しい時間を共有していきたいと思っています。
今年も子どもたちの成長を見守り、夢に向かって頑張る姿を応援していきます。



テンポラリーくまもと2号室

テンポラリーくまもと2号室

お正月料理を囲みながらにぎやかな
2024年のスタートとなりました。

新年明けましておめでとうございます。テンポラリーくまもと2号室は現在4名の子どもたちが暮らしております。外泊の子以外、お正月は全員ホームで過ごし、お正月料理を囲みながらにぎやかなスタートとなりました。お年玉ももらった事が無い、お正月料理も食べたことが無いという子どもたちが、お正月らしい経験ができたことに感激していました。職員も一緒に交わり、新年の抱負を聞きながら今の思いや将来の方向性などについても一人一人から聞くことができました。将来一人暮らしをする事に楽しみもありましたが、それ以上に不安な気持ちを抱えているようにも思えました。ここを出てから子どもたちが戸惑うこと無く安心して生きていけるよう、ここで自立する力を身につけられるように、私たち職員も自立につながる支援をしっかりサポートしていこうと思います。子どもたちが自立した後もここで過ごした時間を忘れないような思い出を2024年も作っていききたいと思います。

